

助産専攻学生による性教育出前講座の評価

Evaluation of the delivery lectures of sex education by midwifery students

弓削 美鈴

Misuzu Yuge

キーワード：助産専攻学生，性教育，出前講座

Key words：midwifery student, sex education for adolescents, delivery lectures

要旨

目的：科目「思春期教育論」で実施した性教育出前講座の経緯及び性教育出前講座前後の高校生の性交に対する意識がどのように変化したのかを明らかにし、授業内容の評価と科目の課題を明らかにする。

結果：高校生への授業内容は98%以上が理解できたと評価され、高校生のニーズに即したものとなっていた。しかし、性交に対する意識は『条件肯定派』は実施前60.1%から実施後68.9%と増加し、性交に慎重となってほしいという性教育出前講座のねらいとは逆の結果であった。これまで性交について考えたことのなかった25.2%の生徒が、他人の問題としてではなく、自分の問題として考えることが出来たことに教育の意義があったと考える。性教育出前講座の計画・実施・評価の一連の学習は助産専攻学生にとって充実感のある経験として評価されていた。実施に向けて準備から評価まで多くの時間を要することから、単位時間数の変更の必要性が明らかになった。

I. はじめに

助産師の主たる仕事は出産介助を中心とした周産期母子ケアであるが、そのスムーズな妊娠、分娩、子育てを補償する為には、成熟期になってからの支援では遅すぎることはいうまでも無い。今日、助産師には、社会環境の変化に応じて、性教育、出産準備教育、子育て支援、中高年女性への支援など幅広いケアが求められている。また「すこやか親子

21」、「次世代育成支援法」の制定により、母子の健康に携わる助産師への期待はますます大きくなっている。日本助産師会では組織的に平成10年から思春期教育への取り組みが始まり、平成13年度は「思春期個別相談指導マニュアル」「思春期集団指導マニュアル」を作成し、相互に指導者研修会を開催し、平成15年度から47支部で電話相談が実施されている。平成19年度の出張教育件数は3098件、個別電話相談件数は19468件にまで及ぶ

ようになっている（岡本，2009）。こうした助産師の役割拡大に伴い、当大学別科助産専攻においても、思春期の対象へ性と生殖に関わる健康問題の支援を学ぶことを目的として、性教育を計画、実施、評価の一連の過程を学習することを課題として「思春期教育論」の科目を設定した。

今回、「思春期教育論」で指導した別科助産専攻学生14名（以後学生とする）が実施した高校3年生への性教育出前講座（以後出前講座とする）の経緯及び、学生の出前講座の評価、さらに実施前後の高校生の性交に対する意識がどのように変化したのか明らかにし、プログラム内容と科目の課題を明確にする。

Ⅱ. 科目の概要

1. 目的・目標（表1）

思春期の抱える性の問題を明らかにし、性教育の進め方について学習する。

- 1) 思春期の特徴と問題について説明できる
- 2) 性教育の歴史について説明できる
- 3) ピアカウンセリングの方法論について説明できる
- 4) ピアカウンセリングの技法を用いた性教育を実施・評価できる

表1 思春期教育論シラバス

回数	内容	日程
1	思春期の特徴と抱える問題	5月21日
2	性教育の歴史、ピアカウンセリングとは 1	6月8日
3	ピアカウンセリングとは 2	6月18日
4	出前講座準備（内容についてクラス討議）	6月25日
5	出前講座リハーサル	7月13日
6. 7	出前講座本番(2コマ 100分)	7月16日
8	評価 アンケート集計	7月22日

2. 履修の条件

性教育に必要な集団指導教育の方法論、性

感染症（STD）や避妊方法などは他の関連科目の履修が前提となる。出前講座は6クラスに分かれて（1クラスを学生2～3名で担当）、同じ時間帯で同じ内容を実施する。本授業2コマ（100分）のためには科目規程時間数（15時間）以上に学生が一丸となって準備実施することが必要な科目である。

3. ピアカウンセリング手法とは

高村（1999）は、ピアカウンセリングとは人間の成長と心の健康に関する知識とともに、アクティブリスニング（積極的傾聴）と問題解決スキルを用いて、年齢、社会的地位、抱えている問題などにおいて立場が同様である人々に、ピアの意識を持って行うカウンセリングである。ピア（peer）とは仲間、同僚、同等（対等）者を意味し、すべての世代に通じるものであり、共通の事項について、問題解決にそれぞれが耳を傾け、ピアの支援を受けながら自ら問題解決策を見出し決定することができるものであると述べている。忠津（2002）はピアカウンセリング手法をNancy Fee & YOUSSEF（1996年）の分類を参考に5種類に分類している。情報提供型、教育提供型A（レクチャーのみ）、教育提供型B（レクチャーとピアカウンセリング手法を用いたデスカッション及びロールプレイ）、教育提供型C（ピアカウンセリング手法を用いたデスカッション及びロールプレイ）、カウンセリング提供型（個別電話相談または個人面談）である。本科目は教育提供型Bの実践を目指して行った。

本科目でピアカウンセリング手法を用いる理由として、学生は思春期の子どもたちと比較的年齢が近く、学習者として学生・生徒同士という仲間意識を持ち易く、ピアカウンセリングの基本であるアクティブリスニングが、助産師のケアの基本である女性の健康に寄り添い、支援する方法として最も妥当であると考えた。本来ピアカウンセリングの養成には

4日間30時間を要するとされているが、基本的なピアカウンセリング概念及びアクティブライニングロールプレイ、ネゴシエイト、ライフラインなどの指導方法を教授した。

Ⅲ. 性教育出前講座の経緯

1. 事前調査

単元1「思春期の特徴と問題について」講義終了後、実施予定の高校生3年生（以後生徒とする）に向け指導する生徒のレディネス調査として、前年度の出前講座調査用紙を参考に検討した。完成した調査用紙は養護教諭を通して学年会議で検討後、修正を求められ1週間後再度提出し、学年会議、職員会議で了承され、アンケート調査が実施された。

殆どの学生はアンケート調査が初めてで、データのコーディング、欠損値の処理、集計方法、コンピューターによるデータの処理等基本的なアンケート処理方法を指導した。

学生は自分が担当するクラス分をそれぞれ集計し、学年全体（6クラス）の集計及びグラフ作成は教員が行った。その結果を持って、授業案を検討する事となった。

2. 出前講座授業案の検討

単元4「出前授業準備」の中で事前調査を基に、学生が主体的に6つのパートに分かれて内容・方法を検討した。各授業案は課外時間で教員と相談しながらの作成となった。1週間後、第1回目の完成となり、クラス全員で課外時間に読み合わせをしながらパートの内容を相互に確認検討した。1週間後のリハーサルに備え教材も同時に作成した。「人工妊娠中絶についてはあまりふれないように、HPVワクチンについてふれて欲しい」など高校側の意向の調整を教員は行った。随時担当学生に連絡し修正を加えて、第2回目の完成となった。

リハーサルでは、本番同様に2コマ100分

の授業をクラス毎に行ない、その後内容と方法について丸1日を要して検討した。リハーサルでは担当教員以外の教員の参加もあり、貴重な意見を受けながら準備することが出来た。準備時間が短かった為、内容がリハーサルになって多くの箇所に齟齬があり大幅な修正となり、最終的に完成したのは本番前日の朝となった。

3. 性教育出前講座のプログラム（表2）

テーマ『自分も相手も大事にしよう!』

ねらい：男女の相違について理解し、性交に慎重となり、必要な交渉ができる

表2 出前講座授業案

時間	内容	方法・備考
3分	導入・ゲランドルールの説明	
10分	思春期のころと体(月経・射精・包茎・男女の性欲)	
15分	妊娠の成立と命の誕生	胎児の回旋を実演、一緒に努責
10分	休憩	
12分	妊娠と出産の適齢期 10代の妊娠のリスク、人工妊娠中絶	
25分	性感染症、コンドームネゴシエイト	握手で感染の広がり、男女に分かれてネゴシエイト
20分	ライフライン(人生設計) 自分を支える人との	自身のライフラインを考える 大切なものを考える
5分	まとめ、詩の朗読	
10分	アンケート調査、片付け	

4. 事後調査

実施後の高校生への調査票については、学生間で主体的に準備をした。

結果については、事前調査と同様クラス担当学生が担当のクラス分を集計し、教員が全体をまとめた。

5. 助産専攻科学生の課題レポートからの評価

事後調査の集計後、各プログラム内容の評価及び全体の評価を課題として提出された学生個々のレポートの内容をKJ法にて整理した。

IV 結果

1. 事前事後調査

1) 事前調査の対象と方法

N県立高等学校3年生226名（回収率100%、男子94名、女子132名）。各クラスの保健委員を通して朝のホームルームの時間に無記名自記式の調査票を配布、封書にて封印し回収を行った。調査票には成績には関連しないこと、個人は特定されないこと、全体の結果は養護教諭、学年担当教員に連絡する旨を記述し、養護教員より説明がなされた。

調査内容は属性、性交についての意識、性感染症について知識等である。

2) 事後調査の対象と方法

出前講座の最後に、学生が配布回収した。回収数226名（回収率100%）

調査内容は、出前講座内容の理解度、コンドームネゴシエットの自信度、性交に対する意識、教材の適正について等である。

2. 調査結果

1) 高校生の各プログラムの理解度

各プログラムの内容の理解度は「よく理解できた」「理解できた」を合わせると97.8～99.2%と評価していた。自由記述には「わかりやすい授業で、性交について知識がさらに深まった。赤ちゃんの出産も実演してくださ

ったのでわかりやすかった」「命の重さを改めて知ることができた」「楽しく分かり易い授業でした」「とてもいい話でした」「ためになった」と肯定的な意見が多くあった。（図1参照）

「ライフライン（人生設計）について考えられたか」の問いに『とても考えられた』『考えられた』を合わせると92.6%が考えられたとしている。「自分を支える人やものについて考えられたか」の問いには『とても考えられた』『考えられた』を合わせると97.8%が考えられていた。自由記述には「自分のことについてこんなにも考える機会が今までなかったので良い機会になった」「詩が良かった」と記述されていた。

「コンドームを持っていない時にSEXを迫られたら、説得できそうですか」の問いに『とても自信がある』『自信がある』を合わせると83.2%で、『全く自信がない』は5.7%の結果であった（図2参照）。

2) 性交（SEX）に対する意識の変化

「あなた自身が性的接触（SEX）することについてどのように考えますか」の問いでは、『結婚まではSEXしないほうがよい』の回答は変化が見られず8.3%であり、『SEXしないほうがよい』は実施前6.4%から実施後8.8%へと変化した。『愛情が深まればSEXしてもよい』が実施前11.5%から実施後17.1%

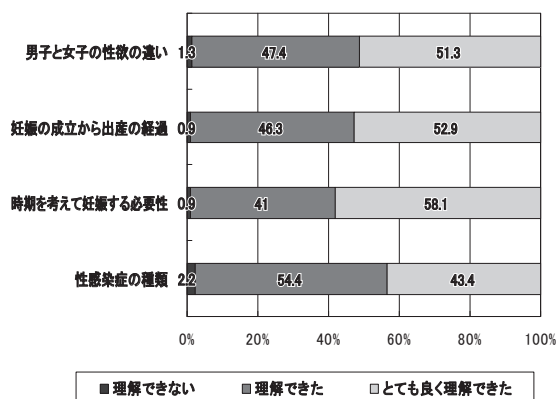


図1 プログラム内容の理解

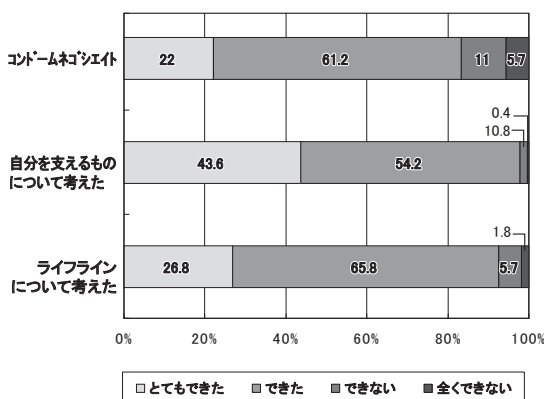


図2 達成度と自信度

と変化していた。『考えたことがない』が実施前25.2%から実施後13.2%と有意に ($p < 0.01$) 変化した (図3-1 参照)。

『SEXしないほうがよい』と『結婚まではSEXしないほうがよい』を合わせて〈慎重派〉とし、『考えたことがない』を除いたものを〈条件肯定派〉として比較した。〈慎重派〉は実施前14.7%から実施後17.1%と変化した。また、〈条件肯定派〉は実施前60.1%から実施後68.9%と増加していた。それぞれの増加率は、〈慎重派〉1.16倍、〈条件肯定派〉1.14倍で、僅かに〈慎重派〉の増加率が高かった (図3-2 参照)。

3) 性交 (SEX) に対する男女の意識の相違

実施前のSEXに対する意識は男女共に『納得すればよい』が男子26.6%、女子24.2%、次いで『考えた事が無い』男子24.5%、女子24.2%であった。

男女に差がみられるのは『機会があれば性交してもよい』が男子8.5%、女子2.3%と有意差があった ($p < 0.05$) 『愛情が深まれば性交してもよい』が男子7.4%、女子13.6%と有意差があった ($p < 0.05$)。『SEXしないほうがよい』が男子3.2%、女子8.3%と女子の回答が多かった (図3-3)。

『SEXしないほうがよい』と『結婚まではSEXしないほうがよい』を合わせて〈慎重派〉とし、『考えたことがない』を除いたものを〈条件肯定派〉として比較した。男女ともに〈条件肯定派〉が多く、女子で〈慎重派〉が僅かに多かった (図3-4 参照)。

実施後の変化については調査票に男女の質問項目が無いために比較できなかった。

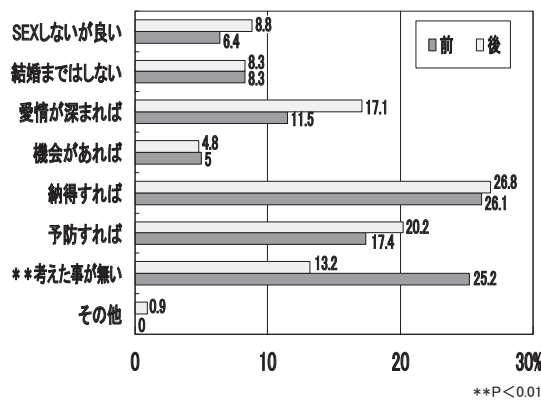


図3-1 SEXに対する意識(実施前後の比較)

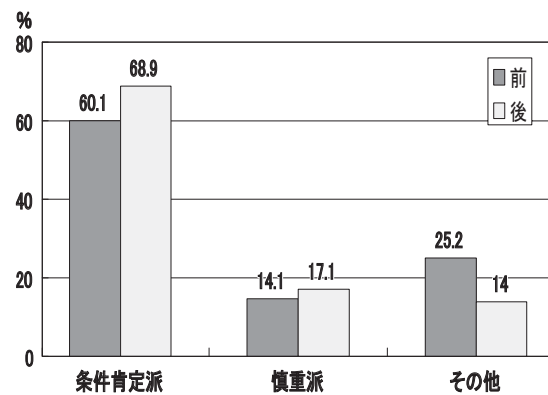


図3-2 SEXに対する意識(実施前後の比較)

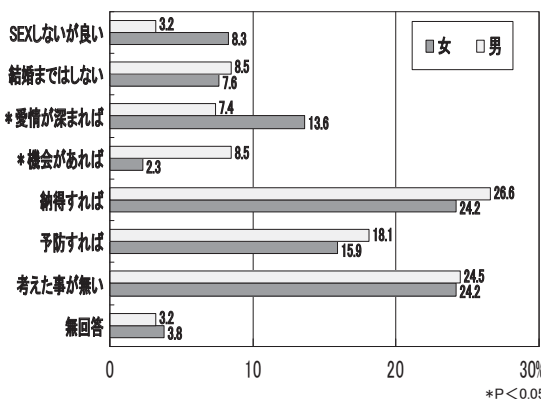


図3-3 SEXに対する意識(実施前 男女比較)

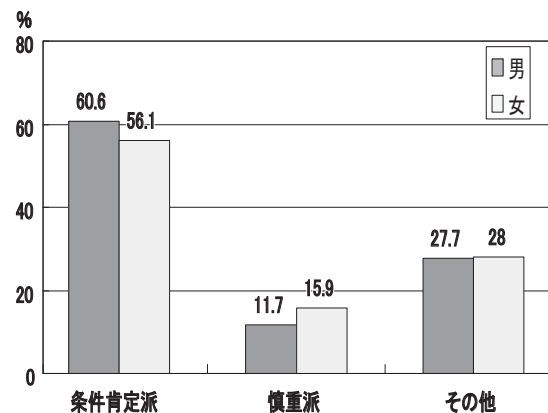


図3-4 SEXに対する意識(実施前 男女比較)

3. 助産専攻学生の出前講座評価

1) プログラム内容の評価

『思春期の心と体』については、「月経・月経症候群について詳しく伝えられて良かった」6名「説明だけだったが、退屈そうにはしていなかった」「基礎体温について詳しく説明できた」「男女の性欲について説明できた」各1名と評価している。

『妊娠の成立と命の誕生』については「誕生の実演は楽しくできた」「初めて産声を聞いたなどの反応があり、やりがいがあった」「出産のシーンは男女ともに興味をもってくれた・興味深く真剣に聞いてくれた」各2名、「産声を流したのは良かった」「男子生徒の反応が少なかった」「卵子と精子はもう少し丁寧な内容にすれば良かった」「自分自身が生まれたいと思ってきたことをもうひと工夫する必要があった」「参加型が良かった」各1名と教材や指導方法の評価についての記述が多かった。

『妊娠と出産の適齢期・10代の妊娠のリスク』では「若年妊娠のリスクを伝えられた」「集中して聞いてくれて心に伝わるものだった」「リスクや中絶について考える機会になった」「今、妊娠したらという問いかけに真剣に考えてくれた」「避妊の大切さは伝わった」各1名であった。

『性感染症』では「握手での感染の広がりは上手いかなかった」3名、反対に「握手とロールプレイングは盛り上がった」「楽しみながらネゴシエーションができた」2名「ネゴシエイトは難しかったようだった」2名「予想以上に考えてくれて嬉しかった」各1名と相対する評価であった。

『ライフライン』では「グループ内で発表もでき楽しく出来た」逆に「時間がなく、発表が出来なかった」「時間が短かった」「漠然としていた人生を具体的な視点で捉えることができた」「ライフラインは真剣に書いてくれた」「詩の内容を静かに聞いてくれた」「ハ

ートや詩の朗読では静かに真剣に聴いてくれた」「朗読が良かった」「誰かに支えられて生きていることが伝えられた」「改めて命の大切さを考えてもらえた」「この分野が一番心に響いたのではないか」各1名と短時間の中でも手ごたえがあったと評価していた。

2) 全体評価

「貴重な体験が出来て本当に良かった」10名、「不安は大きかったが、やり遂げた充実感・達成感の得られる経験となった」9名、「準備の大切さを改めて学べた」6名、「自分が伝えたいことを相手にわかりやすく伝えることの大変さ・難しさが良くわかった」5名、「もう少し準備を十分にすればあんなに緊張せずに行なえたのではないか・もっと良いものになったのではないか」「2週間の準備期間は短かった」各4名、「企画し実施するのは楽しかった」3名、「とても勉強になった」2名、「出前教室を私たち自身が楽しんで行なうことができた」「伝えたい内容と生徒が知りたい内容に差を感じていたが、自分も相手も大事にする！ というテーマが高校生の心に響いたのではないか」「対象を総合的に理解した上で内容の決定をすることが重要だとわかった」「集団指導の大変さを学んだ」「準備ではグループメンバーの協調性が必要だと実感した」「皆で案を出して意見交換することで知識が深まり、アイデアが出て勉強になった」「指導するには自分自身が内容をよく理解し、それだけに準備が不可欠であった」各1名であった。

V. 考察

性教育は歴史的にみても「純潔教育」とされてきた長い歴史があり、「寝た子を起こすな」といった発想で進められてきた。さらに2003年以降の性教育バッシングもあり、健康教育としての性教育はなかなか進まない現状がある。

「健やか親子21」(2000年)は21世紀の母子保健の主な取り組みとして思春期の保健対策の強化と健康教育の推進が課題とされ、その具体的な目標を ①10代の自殺率の減少 ②10代の人工妊娠中絶実施率の減少 ③10代の性感染症罹患率の減少 と目標数値を示した。2006年の健やか親子21中間報告では、人工妊娠中絶は減少傾向にあるが、性感染症は増加しているという結果が示され、性行動のもつリスクについて適切に指導することが求められている。

長野県の20歳未満人工妊娠中絶率は2006年10.6、全国の8.7を上回っている。東京都性教育研究会の2008年度調査では高校3年生の性交経験者は男子52.7%、女子53.5%と既に半数の生徒は性に関する問題に直面しており、現在の性の早熟化、性情報の氾濫した社会情勢をみるとその必要性は大きい。人間にとって性行動の意味とその結果について熟慮できる教育が必要であり、思春期の性に関する問題を発達段階から捉えることが必要である。思春期は性への興味や関心を一番強く抱く時期である。性行動が加速化し、人工妊娠中絶の増加は「道徳の強化」では防ぐことができるものではない。正しい知識を得て、性交に対する判断や意思決定の力をつけることが不可欠である。

性教育の目的は性交や避妊、性感染症予防だけでなく、人間らしさや人間のいのちや異性への思いやりを育むこと、望ましいコミュニケーションをとることができること、正しい知識を得た上で自己決定することである。日々命と向かい合っている助産師だからこそ、性感染症予防などととも命の誕生、素晴らしさを伝えることができると考える。

今回の出前講座の評価はプログラムの内容の理解度と実施直後の高校生の性交に対する意識変化を評価することに限定されたが、各プログラムの理解は98%以上と高い評価で、高校生のニーズに即したものとなった。授業

のねらいである「性交に慎重となり、必要な交渉ができる」については、生徒自身の性交に対する意識は、『条件肯定派』は実施前60.1%から実施後68.9%と増加し、性交を慎重にという出前講座のねらいとは逆の結果となった。しかしこれまで考えたことがなかった25.2%の生徒が、遠い他人の問題としてではなく、性交のリスクや性交の場面でのコンドームネゴシエイトの難しさを今回考えることができたことに意味があった。その結果、『慎重派』の増加率は1.16倍、『条件付肯定派』の増加率は1.14倍で『慎重派』が僅かに高く推移した。このことに意味を見出したい。

性教育は人間関係の教育でもある。相手を思いやる気持ちをもつことで、人間としての自然な性の営みが可能となる。初交年齢を早めるものは、中学の頃、家庭が楽しくない、殆ど話さない、朝食を食べない、母親・父親を嫌い、うっとうしいと思う生徒である(北村, 2009)。つまり、知識ではなく人間としてお互いを思いやることや関係性を意識させることが重要である。

今回、自分のライフライン(人生設計)と同時に自分を支えてくれていた宝物(人・もの)に感謝の意識をもたせることをねらい、プログラム内容に入れた。生徒の自由記述にも「初めて遠い自分の将来を考えた」また、学生の評価にも、「ライフライン・自分を支える宝物」が一番心に響いたのではないかとまた、「男子・女子生徒共に真剣に大切なものを書いたハートを胸に当て、詩の朗読を聞いていて内容が伝わったのではないかと評価している。自分を支える人間関係を意識させるプログラムとして今後も入れていきたい。

出前講座を企画運営した学生の評価をみると、充実感・達成感のある経験、楽しかったなど肯定的な意見が多かった。こうした経験は実際に出前講座を実施することによって始めて得られる成功体験であり、その後の助産師活動につながるのではないかと考える。た

だし、準備には期間が短かったという意見が大半を占めていたことから15時間の科目時間数では準備の時間確保が難しく、他の科目との順序性を考えてカリキュラムを組むことが必要であることが明確になった。

V 結語

出前講座は高校生に理解され効果的である結果が得られた。これは学生の熱意と努力の賜物である。

今回、性教育を実施した学生の性教育についての意識の変化などを調査しておらず、助産師として、ピアとしての意識の変化を今後調査検討していきたい。また、出前講座は学校教育の場で実施したが、その結果が家庭でどのような深まりがあったのか知ることはできなかった。今後の課題として親からの評価を考えていきたい。

最後にご協力いただいた養護教諭、高校生の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 北村邦雄 (2009). 第4回男女の生活と意識に関する調査結果の概要, 現代性教育研究月報, 27(4), 1-7.
- 窪田和子・井上雪枝・竹内理恵子他 (2008). 思春期の性を育む, 助産師, 62(1), 6-24.
- 川島広江・大石時子 (2005). 助産師のための性教育実践ガイド, 医学書院.
- 岡本喜代子 (2009). 思春期に対する日本助産師会の取り組み, 母子保健情報, 88-89.
- 斉藤益子 (2008). 助産師だから伝えたいのちの教育, 助産雑誌, 62(8), 674-679.
- 「健やか親子21」中間評価報告, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/03/s0316-4.htm>
- 高村壽子 (1999). 性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング, 小学館.
- 忠津佐和代・津島ひろ江・池田理恵他 (2002). ピアカウンセリング手法を用いた思春期教育とその実践, 川崎医療福祉学会誌, 12(2), 259-270.
- 東京都幼・小・中・高・心性教育研究会 (2008). 2008年度児童・生徒の性